長期不登校高校生への社会参加支援のための一考察

――認知機能と時間的展望に着目して――

18010PCM　水谷　千尋

Ⅰ．問題

1.　不登校の長期化とその背景要因

平成 30 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（文部科学省，2019）によると，不登校状態が前年度から継続している生徒数は小学校が 42.6%，中学校が 54.3%と報告されている。高校では 30.8%の生徒が前年度から不登校状態にあり，さらに，不登校ののちに原級措置になる生徒は 6.9%，中途退学になる生徒に関しては 25.4%に上り，不登校の長期化が問題となっている。長期化する不登校の背景要因について，杉山（2007）は，①統合失調症を中心とする精神病，②スキゾイドパーソナリティの low function を中心とするパーソナリティ障害（前思春期までは愛着障害（以下，AD）），③高機能自閉スペクトラム症（以下，ASD）をベースとした対人関係での傷つきのフラッシュバックの 3 つを挙げている。特に②と③は，鑑別の困難さがあると考えられる。

2.　社会参加不安について

不登校の支援を考えるうえで，彼らの社会参加不安のあり方を理解することは不可欠な視点である。大久保（2013）は，社会参加を自分以外の他者との関わりを持つことであり，自他の区別を自己内で明確にし，体験を通して情動の共有を経て，間主観的な関係性を築くことと定義した。本研究では，社会参加不安を社交不安症（以下，SAD）として捉えなおし検討を行う。

3.　認知機能について

発達性読み書き障害（以下，DD）は見過ごされやすい特徴を持ち，DD を含む学習障害（以下，LD）は，二次的な心理的問題として不登校になる可能性が示唆されている。また，村上（2010）は，AD 圏の子どもに WISC-Ⅲを行い，認知的なアンバランスさがあることを指摘した。ASD 圏の子どもは，言語性 IQ より，動作性 IQ の方が高いことが示唆されている（神谷，2006）。

4.　ASD 児と AD 児の時間的展望と内的体験

竹本（2015）は，不登校生徒の時間的展望の特徴として，①過去の苦難，②未来のリアリティの無さを指摘した。後藤（2005）は，ASD 児の自己イメージ（以下，SI）を，存在感の希薄化によって人間としての SI が確保できないと　指摘し，それによって将来展望が持てないと示唆した。AD 児の SI は，早期母子関係と関連があり，傷つきと歪みがある（花田，2012）。また，将来展望が非現実化すると示唆されている（竹本，2015）。

5.　本研究の目的

本研究は社会参加不安を抱える長期不登校高校生の心理的課題を検討することを目的とする。

Ⅱ．研究 1

1.　目的

社会参加不安と認知機能および学習能力の関連を探り，類型化を試みることを目的とする。

2.　方法

調査協力者は，不登校生徒を対象とする中高一貫校である S 学園に在籍する高校生 13 名（男子 10 名，女子 3 名）を対象とした。

調査内容は，社会参加不安の程度を測るために LSAS-J を，認知機能を測るためにウェクスラー式知能検査を，学習能力を測るために STRAW-R を，ASD 圏の生徒を検索するために ASSQ を実施した。

3.　結果と考察

LSAS-J 得点がカットオフ・ポイントを超えている生徒が 7 割を超え，SAD の臨床症状を示す可能性が高いことが明らかとなった。また，ASD 群，知的ボーダーライン群，AD 群，LD 群の 4 群が想定され，ASD 群では鑑別診断の難しさ，

AD 群，LD 群では学習に対する挫折感，失敗感が存在することが示唆されたが，個別性が高く認知機能の類型化は困難であった。

Ⅲ．研究 2

1.　目的

社会参加不安と時間的展望の関連を検討し，各群の特性を把握することを目的とする。

2.　方法

調査協力者は，研究 1 と同様。

調査内容は，時間的展望を把握するため TAT を実施した。使用した図版は#1，#2，#3BM，#12BG，#14，#16 であった。

3.　結果と考察

全体として，図版の特徴は金子（2016）で見られたものと類似していた。また，竹本（2015）が指摘した①過去の苦難と②未来のリアリティのなさが本研究においても示唆された。

ASD 群：情緒が伴わず，SI の希薄さ，人間関係イメージの希薄さが見られ，生活者としての感覚が薄いことが示唆された。

知的ボーダーライン群：情緒が伴わない物語を語る事例，図版との適切な距離を取ることができていない事例が存在した。知的な問題から言葉による説明という部分に困難さを感じていた可能性も考えられる。

AD 群：現在について自力ではどうすることもできない無力感の高さ，自己効力感の低さが見られた。

LD 群：全体的に不安について語ることができず，物語のプロセスも語られづらかった。語ることへの自信のなさが考えられる。

Ⅳ．総合考察

1.　不登校と認知機能の関連

不安の高さは人によって差はあったものの，SAD の臨床症状を示している可能性のある事例が多いことが明らかとなった。SAD は，不登校や引きこもりのリスク要因となる可能性が高いとされており，本研究における対象は，すでに不登校を経験していたため，LSAS-J 得点が高くなったと考えられる。また，本研究では知能検査のみではなく，基礎的学習能力を測定する STRAW-R も用いて認知機能の側面を測ることとした。これにより，ポテンシャルを見る知能検査のみでは測ることのできなかった，パフォーマンスの部分に焦点を当てることが可能となった。また，約半数の生徒がウェクスラー式知能検査における PSI 得点が比較的低いことから，学習に対する挫折感，失敗感を抱えている可能性が高いことが予想された。渡部・納富（2019）は，不登校生徒は自己有能感が低く，学習に対する積極性や学習を楽しむ気持ちが減退することを示唆した。このことから，学習面の支援は必要不可欠であるといえる。

2.　不登校の時間的展望と認知機能の関連および支援方針

ASD 群：情緒が語られず，表出性の困難を抱えている（門，2006）ことから，“不安”という情動の認知の乏しさ，SI の希薄さが考えられる。そのため，身体感覚を取り戻して，情緒を受け入れる基盤を構築する必要がある（金子，2016）と考えられる。

知的ボーダーライン群：自我境界のあいまいさから SI が不明確で，刺激に対して注目すべき点を絞り込んで，ストーリーを語るというプロセスに困難さを感じていたのではないかと考えられる。そのため，外的刺激を減らし，生活を安定させることから支援を行う必要があると考えられる。

AD 群：無力感の強い SI が語られることが多く，金子（2016）は，“現在の SI の明確化を目指すべき”と述べており，生活場面においてポジティブな自己を経験することが支援として必要となってくると考えられる。

LD 群：不安について語られず，情緒性の乏しさが見られ，語ることへの自信のなさがうかがわれた。本研究において，LD 群は AD 群の中に含まれているものと想定しているため，支援方針は AD 群同様，生活場面においてポジティブな自己を経験し，自己効力感を回復していくことと考えられる。しかし，AD 群と比較して知的に低いことが予想されるため，理解のしやすい方法で支援を行う必要があると考えられる。